2021年5月31日作成 音楽情報処理講義補助資料(関西学院大学工学部)

作成: 森鈴果

# Google Colaboratoryを用いた NMFマニュアル

参考: https://thinkit.co.jp/article/17411 https://yokaze.github.io/2019/08/12/

<u>1. ライブラリのインポート</u> 参考: https://yokaze.github.io/2019/08/12/

前回インストールしていない以下をインストール。

from matplotlib import pyplot as pl from matplotlib.gridspec import GridSpec

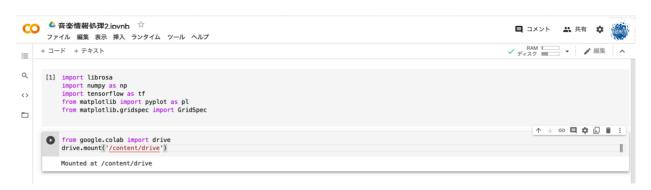
前回インストールした分は除く。 セルの部分に貼付して実行。(実行方法は前回分を参照)



## 2. GoogleDriveとの連携

前回と同様。

from google.colab import drive drive.mount('/content/drive')



### 3. 音楽ファイルの読み込み

今回使用: music test.mp3 2 3mix.mp3 (ドレミファソラシド+2和音+3和音)

前回と同様に、Librosaライブラリで読み込み。(視聴方法は前回参照)

y, sr = librosa.load('drive/My Drive/?????.mp3', mono=True)

\*もし音源の長さが30秒以上だと学習に時間がかかるので、 以下のコードを入力して、先頭30秒だけをyとしてください。

nsecond = 30
y= y[:sr \* nsecond]

読み込んだ音楽ファイルをフーリエ変換し絶対値をとったものを、 平均で割る。(yの平均が1になるよう正規化)

y\_stft = abs(librosa.stft(y).T)
y\_stft /= y\_stft.mean()



#### 4.NMF

参考: https://www.sp.ipc.i.u-tokyo.ac.jp/~saruwatari/SP-Grad2018 02.pdf

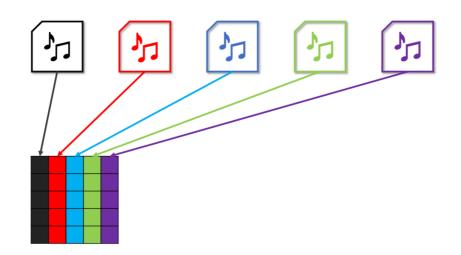
NMFとは

目的:音源データから、「演奏した楽器の特徴(アコーディオンで演奏したとか)」と「演奏された音(ドレミのどの音が鳴らされたか)」を分割する。

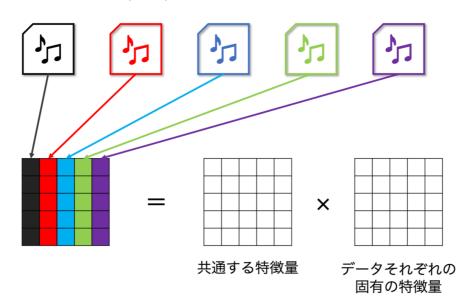
考え方

黒の音データ、赤の音データ…で構成されたデータセットを1つ1つ、1次元に引き伸ばして作成した行列Vを用意する。

行列V

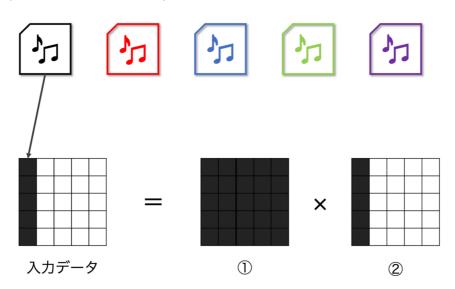


この行列Vを、「黒の音データ、赤の音データ…で共通している特徴量」と「黒の音データ、赤の音データ…それぞれの固有の特徴量」に分割したい。(目的)

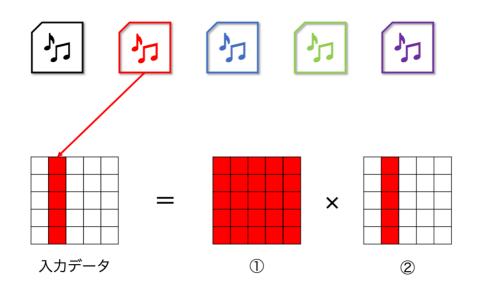


行列の計算方法から、下の図のように行列①と行列②を作成したとき 行列①と行列②のi列目を使って行列V(入力データ)を表現することが できる。

(①と②は非負の行列)



具体的には、行列①には「黒の音データ、赤の音データ…で共通している特徴量」、行列②には「1列目に黒の音データに関する特徴量、2列目に赤の音データに関する特徴…」が格納されるはず。



#### これを解釈すると

「NMFは音データの集まりである行列Vの中に潜む共通の特徴①、各要素の固有の特徴②を取り出す」となり、

今回の目的(音源データから、「演奏した楽器の特徴(アコーディオンで演奏したとか)」と「演奏された音(ドレミのどの音が鳴らされたか)」を分割)を達成できるのではないか。

#### 具体的には、

- ①には、例えば「音源データ(<u>30\_123.mp3</u>)がアコーディオンからなっている」という情報とかが入るはず(基底スペクトル)。
- ②には、例えばどの音程の音が鳴ったかという情報が入るはず(各基底の「アクティベーション」)。
- \*①の情報に②のi列目の情報を加えるから、①と②の行列は非負の値から構成する。

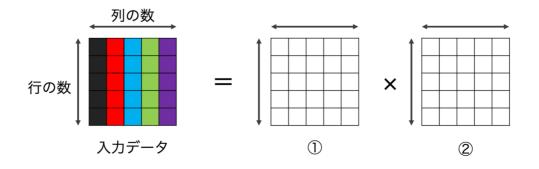
## **5. NMFの実装**

データの準備

行列の計算方法から、

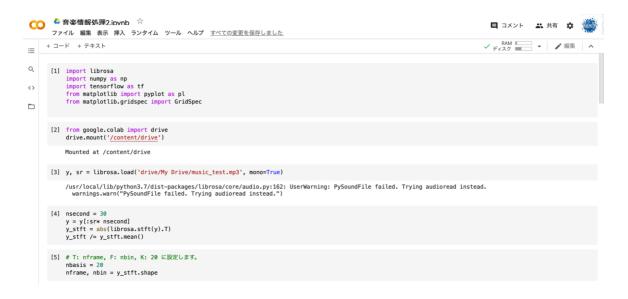
- 1. 入力データの行の数=①の行の数
- 2. 入力データの列の数=②の列の数
- 3. ①の列の数=②の行の数

である必要がある。



よって、形状を以下で設定する。 ここでは、3. ①の列の数(②の行の数)は20とした。(これはハイパー パラメータで自分で好きなように設定できる。)

nbasis = 20
nframe, nbin = y stft.shape



#### 初期値の設定

計算する際に、音源ファイルの値に0が入っていると計算が上手くできないので予め  $y_stft$  に1e-10を加えている。行列①(1w)、行列②(1h) はこれから求めていく(更新していく)ので初期値としてランダムな数が入っている。

```
history = []
x = tf.constant(y_stft + 1e-10)
lx = tf.constant(tf.math.log(x))
lw = tf.Variable(tf.random.normal([nframe, nbasis]))
lh = tf.Variable(tf.random.normal([nbasis, nbin]))
```



グラフのカラースケールを固定するため、1e-3 (-60dB) で足切り。

```
wh = tf.matmul(tf.exp(lw), tf.exp(lh)).numpy()
lw_display = tf.maximum(lw, tf.reduce_max(lw) + np.log(1e-
3)).numpy()
lh display = tf.maximum(lh, tf.reduce max(lh) + np.log(1e-
```

```
3)).numpy()
lwh_display = np.log(np.maximum(wh, wh.max() * 1e-3))
```

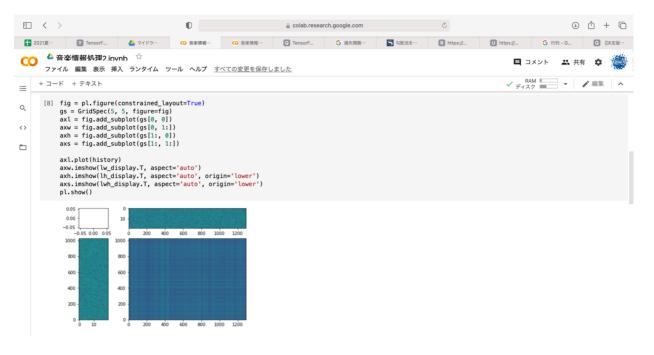
## <u>6. グラフの設定</u>

ランダムな数で構成していた行列 ① (lw) と行列② (lh)、①と②の積 (lwとlhの積) をグラフで表示してみる。

```
fig = pl.figure(constrained_layout=True)
gs = GridSpec(5, 5, figure=fig)
axl = fig.add_subplot(gs[0, 0])
axw = fig.add_subplot(gs[0, 1:])
axh = fig.add_subplot(gs[1:, 0])
axs = fig.add_subplot(gs[1:, 1:])

axl.plot(history)
axw.imshow(lw_display.T, aspect='auto')
axh.imshow(lh_display.T, aspect='auto', origin='lower')
axs.imshow(lwh_display.T, aspect='auto', origin='lower')
pl.show()
```

ランダムな値が入っていることを確認。 グラフの図はどれも規則正しくない数値(色)になっている。

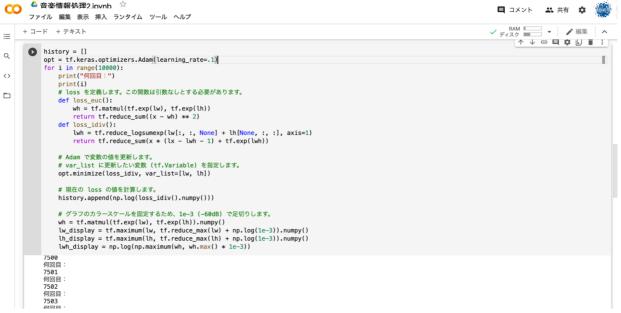


## <u>7. 学習</u>

参考: https://ebi-works.com/deeplearning-5/

#### 解説はコード下

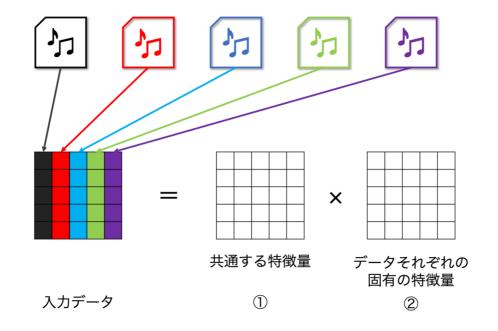
```
history = []
opt = tf.keras.optimizers.Adam(learning rate=.1)
for i in range(10000):
  print("何回目:")
  print(i)
  def loss euc():
      wh = tf.matmul(tf.exp(lw), tf.exp(lh))
      return tf.reduce sum((x - wh) ** 2)
  def loss idiv():
      lwh = tf.reduce_logsumexp(lw[:, :, None] + lh[None,
:, :], axis=1)
      return tf.reduce sum(x * (lx - lwh - 1) +
tf.exp(lwh))
  opt.minimize(loss idiv, var list=[lw, lh])
  history.append(np.log(loss_idiv().numpy()))
  wh = tf.matmul(tf.exp(lw), tf.exp(lh)).numpy()
  lw display = tf.maximum(lw, tf.reduce max(lw) +
np.log(1e-3)).numpy()
  lh display = tf.maximum(lh, tf.reduce max(lh) +
np.log(1e-3)).numpy()
  lwh display = np.log(np.maximum(wh, wh.max() * 1e-3))
CO A 音楽情報処理2.invnb 🌣
```



行列①と行列②をランダムな値から更新して、最適解を求める

4. NMF (NMFとは)から、

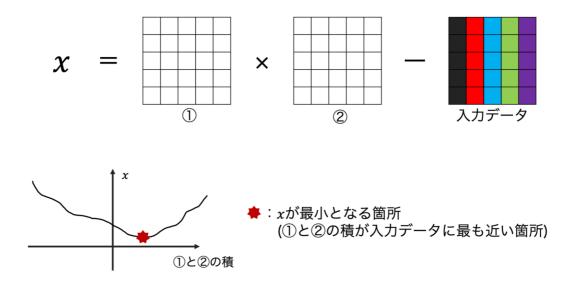
NMFでは、 入力データを全ての音データに共通する特徴量(行列①) と 音データそれぞれの固有の特徴量(行列②) に分割することが目標だった。



よって、①と②の積は入力データと等しくならなくてはならない。 現段階でランダムな値が入っている①と②を、入力データと等しくな るよう更新していく。

「①と②の積は入力データと等しくならなくてはならない。」を「①と②の積と入力データの差がOに近くあれば良い。」 と考えると、

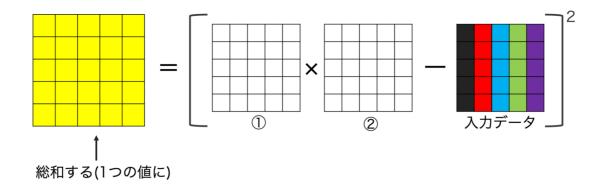
下図のようにxが最小な箇所を探せば良い。



誤差の求め方 (どちらかを選択)

#### #2乗誤差

差が負の値にならないようにするために2乗する。 (最小の値を、最も差が少ない場合としたい。) この総和が0に近いものを探す。



$$\mathbf{X} = (① と ② の 積 - 入力データ)^2$$

def loss\_euc():
 wh = tf.matmul(tf.exp(lw), tf.exp(lh))
 return tf.reduce sum((x - wh) \*\* 2)

#|-ダイバージェンス

2乗誤差をもう少し緩やかになるよう考えた誤差算出方法。 このxが0に近いものを探す。

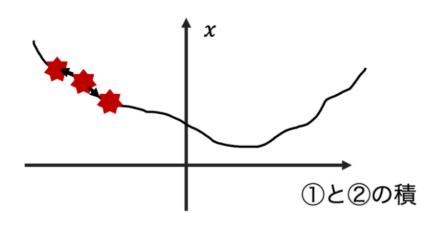
$$\mathbf{\chi} = 1$$
と②の積 ×  $\log \frac{1 \cdot 2 \cdot 0 \cdot 0}{\lambda \cdot 1} - (1 \cdot 2 \cdot 2 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0)$ 

x (①と②の積と入力データの差) の更新と記録 (今回の誤差算出方法はI-ダイバージェンスの方)

(2乗誤差にするには、loss\_idivをloss\_eucにしてください。)

行列① (lw) と行列② (lh) の更新方法にAdamを用いる。

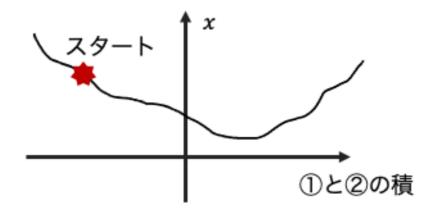
更新するとき、現在のxより小さいxの箇所 (下図の右側) に進むことで、よりx (①と②の積と入力データの差)を小さくできる。



更新方法の1つであるAdamは、更新するときにスタート時点のような傾きの大きい箇所では大きく更新し、ゴール地点の傾きの小さい箇所では小さく更新する手法。

今回はこのAdamを用いて更新する。

参考: https://qiita.com/omiita/items/1735c1d048fe5f611f80



$$h \leftarrow h + \frac{\partial x}{\partial (1) \, \&2 \, \mathcal{O}$$
積)  $\odot \frac{\partial x}{\partial (1) \, \&2 \, \mathcal{O}$ 積)

①と②の積 
$$\leftarrow$$
 ①と②の積  $-$  学習係数  $\times \frac{1}{\sqrt{h}}$   $\odot \frac{\partial x}{\partial (1) \geq 2 \cup 0 \partial (1)}$ 

今回の学習係数(learning rate は0.1とする。)

opt = tf.keras.optimizers.Adam(learning\_rate=.1)
opt.minimize(loss\_idiv, var\_list=[lw, lh])

今回の誤差(x)を記録する。

history.append(np.log(loss\_idiv().numpy()))

グラフのカラースケールを固定するため、1e-3 (-60dB) で足切り。 (4章と同様)

```
wh = tf.matmul(tf.exp(lw), tf.exp(lh)).numpy()
lw_display = tf.maximum(lw, tf.reduce_max(lw) + np.log(1e-
3)).numpy()
lh_display = tf.maximum(lh, tf.reduce_max(lh) + np.log(1e-
3)).numpy()
lwh_display = np.log(np.maximum(wh, wh.max() * 1e-3))
```

この作業を10000回繰り返す。

(13インチ MacBookPro:プロセッサ 2.8 GHz Core i7 macOS Big Sur(11.3) + TensorFlow 2.5での学習)

for i in range(10000):

## 8. 結果の出力

6章同様に出力。

```
fig = pl.figure(constrained_layout=True)
gs = GridSpec(5, 5, figure=fig)
axl = fig.add_subplot(gs[0, 0])
axw = fig.add_subplot(gs[0, 1:])
```

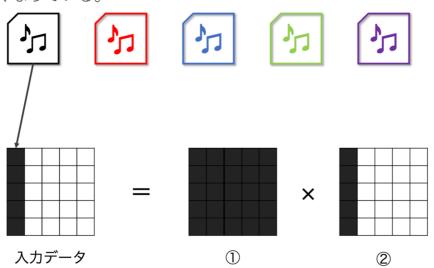
```
axh = fig.add_subplot(gs[1:, 0])
axs = fig.add_subplot(gs[1:, 1:])

axl.plot(history)
axw.imshow(lw_display.T, aspect='auto')
axh.imshow(lh_display.T, aspect='auto', origin='lower')
axs.imshow(lwh_display.T, aspect='auto', origin='lower')
pl.show()
```

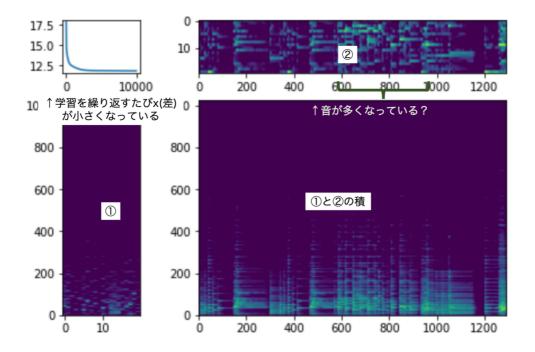


下図から、②は音色の盛り上がりの時系列によって行列が生成されている。

x (行列①と行列②の積と入力データの差)も学習を繰り返すほど小さくなっている。



\*music test.mp3 (出力まで2時間ほどかかる)



\*<u>2 3mix.mp3</u> (出力まで1時間半ほどかかる)

